
黄昏と猫

樹木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏と猫

【Nコード】

N6976U

【作者名】

樹木

【あらすじ】

王都から遠く離れた田舎村に聖騎士様がやってきた。狂言誘拐をおこした姫を連れ戻したい！？頼まれたのは私の義父。そして拒否。そんなこんなで聖騎士ジョゼと旅立つことになった私、神父トワイライト。なんとなくファンタジー。作者はあまり文章がうまくないです。設定も結構揺れます。そして私のご都合主義です。だめだと思っただけ即バックでお願いします。不定期更新です。

執筆メモ的なものの登場人物とか（前書き）

今まで話に出た設定とかをメモります。ネタばれは最新話以降は無いです。（つまり最新話までのネタばれはあり）この話に関係のない話もちらほらあります。たぶん読まなくても問題ない。

執筆メモ的なもの登場人物とか

世界観

夢幻という異世界。ルスカという1人の神によって作られた小さな世界。こちらの世界（作中では現と呼ぶ）のどの時間にも干渉できる切り離された次元。国はカロン、プロキオン、ダイモスの3つしかない。現代にも干渉できるしその先の未来まで干渉できるのでそれなりにハイテクノロジー。携帯とかネットとか普通にあります。魔法もあるよ！なので文明の利器は使わない人は全く使わないです。あと人間は基本異世界トリッパーとその子孫です。トリップしてくる人はルスカの独断と偏見で決められます。

魔法について

異世界トリップしてきた人はトリップのときに「世界の門」を通ります。そこで門番から心の中に種をもらいます。^{イメージ}それが魔力の元になります。属性は炎、風、水、土、雷、闇、光、でも闇と光は珍しい。どの属性になるかは本人の気性による。自分の持つ属性以外の魔法も媒介を使えば使える（呪文の詠唱とか札とか銃とか剣とか）。夢幻で生まれた人は生まれつき種を持っているので本人の気性により個々の属性の魔力を持つ。

瞳の色について

夢幻では瞳の色で相手の持つ性質の一種が分かります。カルマみたいなものです。作中で出てきたら書き足します。

鬼

鬼とはルスカが人間を作ろうとしてできた言っ飛ばし失敗作です。人好きなルスカの気性を継承していて程度の差こそあれ、皆人間好きです。しかし強い力を持つので差別されることも多く、基本的に好んで人に関わろうとはしません。鬼が失敗作である所以は人と違い強い欲望を持たないため進化の余地が薄いことにあります。鬼に人肉は厳禁です。彼らは欲望に非常に弱く、人という欲望の固まりを内包していた肉体を吸収すれば狂ってしまいます。ルスカに直接作られた鬼や、自然の力の凝りで生まれた鬼以外に角はなく、角のある鬼は「真鬼」と呼ばれます。鬼と人の間に生まれた者は鬼か人かどちらかに別れますがどちらも「人混じり」と呼ばれることがあります。「人混じり」の鬼は多少欲に対して免疫があります。鬼は人と契約することが出来、主人にとっても忠実です。鬼の魔法は「変化系」が多く各系統にあわせて、特定の動物に変化し、身体能力を強化できます。鬼を使役する人間を「鬼使い」と言います。貴族に多いです。

人物

トワイライト・キャット (19) ♀

美形。求血族。ひ弱 自然光に弱い 意外と厳しい 神父 薄い茶髪

ジョゼ・キャット (16) ♀

イケメン。人猫族 鍵尻尾 聖騎士 姫と幼馴染み バイク乗り
濃い焦げ茶の毛並み(?)

セルシス・キャット (28) ♂

へたれおとん。人猫族 神父 酒好き 深緑みたいな黒みたいな変な毛色 過保護 お婆様のお気に入り

お婆様 ♀

キャット家の当主。セルシスのおかん セルシスに対してものすごい支配的、かつ過保護 セルシス以外の子供にはあんまり興味ない感じ お婆様っていうほどの歳じゃないたぶん

さんさんと降り注ぐ太陽の下、西に向かい街道を行く1組の男女。女は人猫族で茶色のくるくるのくせ毛にぴんつと尖った耳、簡単な男物の旅装束を身にまとい、実用的で品のいい剣を差し、歩くリズムに合わせて長いしっぽをゆらゆら揺らしている。男は女よりだいぶ明るい茶髪で、象牙色の美しい肌に赤い唇、なのに妖艶さを全く感じさせない楚々としたたたずまい。普通にしていればさぞかし目を見張る青年だったろう。だが、現実はそのうまくはいかず、彼は真っ青な顔で蝙蝠傘を手に持ち陽をかわすようにふらふら少女の後ろを歩いている。黒い神父服に首からは銀の魔法陣をぶら下げた彼は情けない声をあげた。

「本当にすみません……。私……ふう、もう……」

「なんだ、もうへばったのか。男のくせに軟弱なやつだ」

少女は文句は言うものの、男の傘を持っていない方の手を引いてやる。

「もう少しがんばれ。もう町に入る。そこで宿を取ろう」

まだ昼にもなっていない。この男との旅は本当に進まない。

「夜の方が楽なのか？」

「ま、まあそうですね」

ひいひいと荒い呼吸を繰り返しながら、男は答えた。

「それなら、夜に出発することにしよう」

「本当に……すみません……」

「お前はいつなら調子よく外を出歩けるんだ？」

すっかり日も暮れ、月が天頂に上る頃二人は旅を再開したのだが、またすぐに男が不調を訴え結局休み休みゆつくりと進んでいる。相も変わらず真っ黒な蝙蝠傘をさし月光を遮断して歩く男は真っ青だ。対する少女は闇をもともせず全く疲れを見せる様子もなく飄々

と進む。足下も覚束ない男とは大違いである。そもそも何故この2人がともに旅をしているかというところ4日前にさかのぼる。

彼女は苛立っている。目の前の男が自分が訪ねてきた相手ではないからだ。首都からはるばる訪ねてきたというのに、相手は昨夜村の酒場向かったきり帰ってきていないらしい。神父のくせに。齒を噛み締めるときちりと音がした。その音に怯えてか、または彼女の形相か、目の前の青年の肩が跳ね上がる。

「なんで神父が酒を浴びるように飲むんだ……」
「すみません。いま呼びにいかせていますので」

このやりとりももう5回目だった。彼女をこの教会まで案内してくれた村の子供のリーダー格の姉弟を青年は酒場へ向かわせた。しかしもう一時間はたっている。大方二日酔いで起きることが出来ない神父を二人掛かりで引きずっているのだろ。彼女の機嫌が悪すぎてお互い挨拶でさえままならない状態で、青年としては気まずいことこの上ない。時間がジリジリ過ぎ行く中、ようやく玄関から扉の開く音がした。

「神父様！　ちゃんと自分の足で歩けよ！！」
「ぬ……ん」

ずりずりと引きずるような音と少年の叫び声が聞こえる。どうもこのままだと話し合いにもならなそうだ。

「少々おまちください」

青年はそういうと席を立つ。少女の顔は恐くてもう出来なかった。そうして玄関に向かうと、予想以上に飲んでいたら深い緑の髪に同色の耳をへたらせ、くたびれた神父服に力なく垂れ下がる尻尾の青年が少年に寄りかかっていた。玄関の扉を押さえていた少女は急いで扉を閉めた。陽光が遮断されたこととつつむいた目の前に足が見えたことにより人が来たことを察したらしく、のろのろと顔を上げたどうしようもない二日酔い神父は真っ青な顔で

「うおげえ」

吐いた。

「うわっ、ちょ」

吐瀉物をぶちまけられた少年は思わず神父から飛び退く。

「あー、あー、もう何してんですか。アメリカもマグもありがとうね。マグはお風呂に入って」

「そんなこといって！ ライト神父、俺に神父様の世話させようって魂胆だろ！」

鼻息荒く少年は言い放つ。

「その通り。ほら、入っておいで、私はここを片付けるから。洗濯機回しておいてね」

「あーあ、１２にもなって人と風呂か。しかも大の大人の介護って

……」

周囲に暗雲を製造しながらマグは酔っぱらいを引きずって脱衣所へ消えた。

「それにしても、また派手にやってくれたものです」

「ライト神父、ホース、洗面所に繋いできたよ」

「絨毯はがして、そのままながしてもらえます？ 私は石けん持ってきますすんで」

「了解、でも絨毯は神父がはがしてよ。正直触りたくない」

「あー、まあそうですね。身内の不始末だし、ここ私の家だしね」
そうして、てきぱきと絨毯を取り上げ、外に放る。ついでに扉にストッパーもかける。

「…絨毯は捨てた方が良さそうですね。玄関だけ流してください」
「らじゃー」

ライトは洗面所に向かい適当に蛇口をひねる。

「水、このぐらいでいいですかー？」

「もっと強くー、ゲロが外に出ないよー」

「分かりましたー」

そしてさらに適当に蛇口をひねると、洗面所備え付けの戸棚をある。

「ゴミ袋ゴミ袋、と」

「おい」

低い声が聞こえる。ふと振り返ると華奢な脚絆が見え、その二本の足の間やや後ろに毛の逆立った焦げ茶色の尻尾が見える。例の彼女だ。

「帰ってきたんじゃないのか？いつになったら会えるんだ」

少女はギロつと音でも聞こえてきそうな勢いでライトを見下ろす。

「あ、う」

蛇ににらまれたカエルのように固まりつつ、ライトはぎこちなく愛想笑いをうかべた。

「それでえ？ なんのようなわけ」

「ずきずきと痛む頭に手をやりながら神父は少女を睨む。しかし、少女が口を開こうとすると遮るように手をかざす。

「いいよ、どうせアレでしょ？ 実家に帰って騎士をやり直せとか何とか。王宮勤めをしるとかかんとか…。お前も大変だねえ、ジョゼ」

「ちがうが…」

自分の世界に入っている神父には少女の言葉等子猫が鳴いているに等しく、つまり『馬の耳に念仏』。

「ちゃんと帰ってお婆様に言っておいてよね！ 俺は可愛い義息子と仲良く教会暮らしたからさ」

「だから違うと言って…ちょっと待て、義息子って何だ？ 誰が義息子…？」

「だから帰れって、ライトこいつ追いつ返して塩撒いて」

「そんな！ 聖騎士様ですよ？ 不敬罪とかで処罰されたらどうするんですか義父さん」

「処罰なんかされないさ。俺は婆様のお気に入りだからね。そうだろう？」

「そんなことはどうでもいい！ 私は身内の暴言にまで目くじらを立てたりしない！ それより！」

少女は、ジョゼは一旦言葉を区切る。

「義父さんって、どういうことだ」

教会の男たち2人はきょとんと聖騎士をみたあと、互いを指差し

「親」

「子」

と完結に述べた。

「ば、な、なんだそれ、聞いてないぞ…」

「なんでそんなこと一々姪に報告しないといけないのさ？」

「え、姪御さんですか？ 聖騎士様、お義父さんの姪御さんですか？」

「そうなのー、でも安心してねライト。お義父さん家とは縁切つてから従妹じゃないよ」

「義父さんの実家が代々聖騎士の家系だということは聞いていたが…、正直なところ、欠片も信じていませんでした。まさか本当だとは…」

「おい、見かけによらずなかなか厳しいな。お前の義息子」

「お前つて呼ぶな男女。あと、ライトは厳しくなんか無い。常識的で正直なだけだ」

そう言つて神父は義息子にでれでれと笑みを見せる。

「…幸せそうで何よりだ。ところで本題に入りたいんだが」

「あー、だめだめ。家には帰らないつて」

「うぬぼれるなよおっさん。今回は別件だつて言つてんだろ」

「別件？なにそれ。俺とあんたに家の話以外になんかあると思つてんの？」

「私としてもこんなことをお前なんかに頼むのは不本意なんだが」
はあとため息をつきつつジョゼは口を開く。それに神父は顔を引きつらせる。

「なに、俺引き受けるなんて言つてないんだけど…」

「事の起こりは2日前。姫様が誘拐された」

「なにそれめんどくさ」大変じゃないですか！」「…ライト」

義息子は義父を無視した。当然聖騎士も叔父を無視する。

「まあ、そんなに焦るようなことでもないんだ。もちろん、のんびりしていられる訳じゃあないが…」

「どういうことよ？」

「これが脅迫状な訳なんだが…」

ジョゼが差し出した紙切れを親子は覗き込む。

ひめは あずかった。 かえしてほしくば ひめとねんれいさ
6さいいないのきやつとけの にんげんをひめのこんやくしゃとし
てつれてくるべし

「。なにこれ」

「脅迫状だ」

「汚い字」

「これが、姫様の筆跡だ」

「同じ、ですね」

「チヨウキレイナジデスネ」

脅迫状を振り振りジヨゼは話を続ける。

「ご自分で身を隠された。なので早々命に関わるほど切迫した状況
という訳でもない。だが、姫様の協力者が誰か分からないためそう
悠長にはいられないが」

「ならさつさと連れて行きなよその姫と6歳差以内のやつをさ」

「どうでもよさそうに叔父はだらりと義息子にもたれかかる。しか
し、聖騎士は不本意そうに首を振る。

「察しろよ。お前の名前は？」

「セルシス・キャット」

「歳は？」

「28」

「姫様の歳は？」

「知るか」

「たしか22歳ですよね」

「そう、つまり姫様の婚約者はお前だ」

「は」

思わず腰を浮かせたセルシスのとなりでライトは納得したように
ポンと手を叩く。

「なるほど、キャット家で6歳差ですね」

「その上唯一の独身男子だ」

「え、なにそれ」

「なにそれと言われても、叔父たちはお前以外結婚してしまっている。それに私の従兄弟にしろ兄弟にしろ１６歳の私が一番年上だつまり年齢が足りない」

「だが断る」

考えるそぶりも無い。

「義父さん……」

「お前に拒否権等あるものか」

ジョゼは不愉快そうに鼻を鳴らす。

「お前は縁を切ったとか言っているが、お婆様に逆らえるのか？現実的に考えてお前は逆らえるのか？」

「年上にお前って言うな」

「話をそらすな。いいか、いまこれを断っても必ずお婆様は次の手を考えてくる。姫様奪還よりお婆様はお気に入りのお前を取り戻すことの方を重視している。そのときお婆様のお眼鏡にかなわないお前の大事な大事な義息子はどうなるかな？」

「ぬぬぬ……でもそんな結婚なんて！見たことも無い女と結婚なんて！」

ジョゼの口元が引きつる

「見たこと無いのかお前。テレビあんだろ」

「すみません。この人普段子供向けアニメ番組しか見ないので……」

「いい歳して……」

ふうと息を吐きジョゼは深く椅子に腰掛ける。

「まあ、お前の言うことも分かる。結婚はしなくていい。私から王に進言してやる、でも姫様は連れ帰らないと行けない。説得には一緒に行く、つれて帰ってしまえばどうとでもなる。これでどうだ」セルシスはライトをちらっと見、そしてジョゼに向かってにっこり笑った。

「だが断る」

「うざい！なぜだ!？」

セルシスは子供のように唇をとがらせ、あさつての方向を向いた。
「めんどくさいんだもん。遠出とかしんどいんだもん」

「ふざけるな！ 国の一大事にお前は…！」

「あの…」

ヒートアップするジョゼにライトは恐る恐る声をかけた。

「私ではいけませんか？」

「は…」

「義父は実家とは縁を切ったとはいえキャット姓を名乗っています。そして養子縁組をしている私もキャットの姓を名乗っています」

そしてセルシスを軽くしばきながら穏やかに「力技っぽいですが一応条件には当てはまるのではないでしょうか」と続けた。

「おまえ、歳は？」

「19です」

ジョゼはしばらく逡巡していたがやがてすごい勢いでライトの方へ向き、満面の笑みを浮かべた。

「その話、のった…！」

それをきいてライトもにつこり笑い、手を差し出した。

「トワイライト・キャットです。よろしく願います」

「ジョゼ・キャットだ。よろしく頼む。義理の従兄弟殿」

がっしりと手を握り合った二人を引き離すように、むしろジヨゼを突き飛ばすようにセルシスが間に入った。セルシスはライトの肩をがしつと掴むと鬼気迫る表情で口を開く。

「そんなの、許さないに決まってるじゃん。てか、無理じゃんライト。無理じゃん」

「ですが…」

「だめ。何かあったらどうすんの？ 遠出をするにはお前の身体は問題が多いと思わない？」

「何が起るといふんだ」

ジヨゼが若干あきれ気味に口を挟む。冷えきった紅茶で唇を湿らせながらセルシスを諭しにかかる。

「お前の義息子19だろ？ 過保護がすぎるんじゃないか？ むしろ、そんなに心配ならお前が姫を連れ戻すのに同行してくれてもこちらはいっこうに構わないんだが」

「それはいや」

つんとそっぽを向く。しかし、義息子は離さない。ぎりぎりと肩を掴んだその手を痛そうにライトは外す。思いのほか力を込めすぎていたことにセルシスも気がついたのかあっさり手を離す。ジヨゼとしてはもうめんどくさいやら鬱陶しいやら心底冷たい視線で義親子を射す。そんな視線には気づかない様子でライトは真摯な態度でジヨゼに向かう。

「大丈夫です。私に向かいます。しかし、貴方には私について幾つか留意して頂きたいことがあります。よろしいでしょうか」

ライトの真面目な様子にジヨゼも姿勢を正す。セルシスだけ依然、不機嫌な面持ちでむっつりと黙っている。

「言ってみろ」

「では、まず私は求血族です。定期的に血液を経口摂取しなくては

なりません」

「な…、お前吸血鬼か」

ジョゼが驚き口を滑らせると、間髪入れずに3人が囲んでいた口ーテーブルから轟音が響きティーセットが揺れた。

「吸血鬼…差別用語だぞ。ご高名な聖騎士サマ」

「そう、正確に”鬼”でないものを”鬼”と呼ばわるのは鬼にも失礼ですし、何より人猫族も求血族も同じように人混じりから派生した亜人種族です。なにより貴方もご存知かとは思いますが、人猫族と同じように求血族も人間と認められています」

ジョゼは恥じたように居住まいを正し、素直に頭を下げた。尾も耳も力なく垂れ下がっている。

「失言だった。すまない」

「いえ、こちらの方こそおとなげなかったですね。申し訳ありません」

「でだ、どれだけの期間ライトを連れ回すつもりか知らんが、この子は週1での吸血が必要になる」

いままでになく真剣な様子でセルシスはジョゼに向かい合う。その表情は童顔なセルシスでも老成した親の顔だった。そしてジョゼも真剣な顔で尋ねる。

「それは獣の血液でも構わないのか？」

「構うわ！　どこの病院で患者の輸血に獣の血を使うよ！？」

「ふむ、それもそうか。すまない」

「いえ、個体が少ない求血族のことは一般的には広く知れ渡っていませんから、無理もありません」

ライトは穏やかに言葉を返した。

「求血族が摂取できる血液は輸血してもらえる血液型でなくては成りません。例えば、私ならばB型ですので、同じB型の血液かO型でないという意味がありません」

「へえ、興味深い。だが、その点は問題ない、私もB型だから私が供血すればいいな」

「俺もB型だからね！ ていうかお前んちB型かO型しかないじゃないよ」

2人ともセルシスには見向きもしなかった。

「いくつかということは他にも気になる点があるんだろう？」

「ええ、それは私が光に弱いこととひ弱なことです」

「…後半の言葉が多少気になるが、まずは光に弱いつてどういうことだ？ 日光に弱いのか？」

ジョゼの質問に対しトワイライトは両手の指を組み、その上にあげをのせ深刻そうに告げた。

「月光にも弱いです」

そして、シリアスな空気を装い続ける。

「ていうか、人工の光以外の元では私、あまり元気ではありません」
「そうか…」

それ以外の何が言えただろう。ジョゼには選択肢がないのだ。

「ひ弱というのは…」

「言葉通り、私弱いです。体調を崩しやすいですし、喧嘩も弱いです。あと骨も弱いです」

ジョゼは思った、この親子うざい。

「注意事項はそれだけか？」

「そうだな！ 他にもなんかある気がするけど、ライトが遠出をするのはこれが初めてだからな。これ以上何が必要なのか俺にもわかんね」

「それで、どうするんですか？ まずは王都に向かうんですか？」

「そうだ。トワイライトが同行してくれることを王に報告し、そのあとすぐに姫様を探しに行く」

「まさか、二人だけで探しにいくなんてそんなこと無いですよ」

一瞬の沈黙がカーテンを閉め切り人工的な光で明るい（つまり電気）応接間に降りる。ジョゼが曖昧に微笑む。そんな、彼女に全く似合わない表情からも何かまずいことがあることが分かる。

「場所の見当はついている」

答えになっていないことは彼女が一番分かっていた。協力をあおいでいる以上説明した方が良いということも。ジョゼは憂鬱そうに仰向く。いくら親戚とはいえ一般市民に王宮の恥を晒すのはキツいものがあつた。

「姫様が行方不明なんて外聞が悪いだろう？ それも狂言なんて。」

ただでさえ姫様は国民からの人気があまりないのに。それに下手に兵を動かしてカロンやプロキオンを刺激するのも本意でない」

「そりゃそーだけど、ってかさ、もうほつとけば？」

その言葉にジョゼとライトはセルシスを振り返る。

「お前は…。親のくせに本当に気持ち悪く察することが苦手だな」

「そうじゃないでしょ。だって為政者でしょ。どう考えてもそのお姫さん、国のためにならないじゃない。それを排除する英断をしてこそ国王じゃないのさ？」

「王族だって人間だぞ…。それを…」

ライトがはつとした顔で手を打つ。

「ジョゼさん！ お姫様と仲良しだったんですね！」

その言葉にジョゼは渋い顔で押し黙る。それを見たセルシスもぽんと手を打つ。

「王族とは民のためにあれ、なんてお前が一番主張しそうなことだものな！ そーかそーか」

セルシスはジョゼに対してにやにやした顔を隠さなかった。そしてジョゼも顔を背けたりしなかった。

「…お前の息子、本当になんというか、厳しいな」
「鋭いだろう？」

誇らしげに笑むセルシスにジョゼは疲れたような苦笑を滲ませながら組んだ手の甲に額を下ろした。そして、浅く息をつくときとライトに向かい合う。

「助けてくれ。彼女は自尊心が高く我が侘で傲慢でどうしようもない方だが、彼女は幼馴染みで、私の耳を、尻尾をバカにせず、私にとって…。いや、ちがうそうじゃない」

ジョゼの剣の様に鋭い視線がライトを射抜く。

「大切な、友達なんだ。どうか力を貸してほしい」

「最初からそう言えばうちの可愛い息子を貸してやるのもやぶさかではない」

セルシスがふんぞり返るのを見てライトがさわやかに笑った。さわやかだったのだが本人の色が白すぎていまいち”花が咲くよう”とか”輝くよう”と形容できないことが何とも惜しい。

「さあ、お義父さんが快く送り出してくれる気になったところで、移動手段はどうしますか？」

「ああ、それなら心配ない」

そう言いながらジョゼは他の2人を連れて玄関へ向かう。少し誇らしげに親子を振り返りながら扉を開け放つ。

「私が乗ってきたバイクが…」

2人は蒼白だった。ライトなどは青白いを通り越してもはや紙のように白い顔色をしていた。その2人の引きつった顔を怪訝そうに

見た後、ジョゼは視線を表へ向けた。

時が、止まった。

おそらく、大型のバイクがあつたであろう家のすぐ前、教会へ向かう大きな通りには大勢の村民がしゃがみ込み何か作業をしていた。あたりにはネジやスパナ、ドライバーや、いやこれ以上は言うまいともかく、散乱していたのだ。散らばっている残骸の中にシートらしきものがみえることや、明らかなタイヤがあることから、これが彼女の愛車の成れの果てであることは想像に難くない。

「お、神父様！　なんか置いてあつたからやつちやつたよ！」

「珍しいね、神父様がこんなもの表においておくなんて。不用心だよ」

「やはり、久々にやると腕が落ちておるな」

村人たちが口々に楽しげに声をかけるが、言葉を返せる余裕なんてない。ライトはびっしょり汗をかきながらおろおろとジョゼの顔をうかがい、セルシスはやはりこちらも凄まじく汗をかきながら死んだ目でうつすら笑んでいる。そしてジョゼは、ジョゼは微動だにしなかった。まるで岩の様に、呼吸すら忘れたようにじつと彼女が愛車を止めたであろう場所を凝視していた。

「知らなかったのね…」

神父義親子が村人を散らし、残骸のみ散らかった大通りでは座り込んだ聖騎士と神父2人が途方に暮れていた。さすがにセルシスがジヨゼにかける言葉もやわらかい。

「元気を出して下さい」

「いいんだ、事前に調べてこなかった…、私が、悪い…」

そういいながら体育座りをしたジヨゼの耳と尻尾はしょんぼりと垂れた。

ここは、ダイモスという国の最北にあるアインスという村だ。隣のカロンに最も近い村で、カロンとの貿易はここが主だ。そして、この村には独特のルールと村人のあらがえない性があった。この村では、公道にあるものはみんなのもの、かつ機械類を見ると解体せずにはいられないという謎の性が。元々、何故か機械好きが集まって出来た村だけあって皆機械好きの血を引いているためか機械と見れば皆我先にとばらしにかかる。それこそ老若男女問わず。しかし、どれだけ綺麗にバラバラに出来ても、決して元通りには出来ないのがここの住人であった。

「村で集金して弁償するよ」

「それは、是非とも頼む」

「こんなときに言うのもなんですが、ジヨゼさん。バイクはダメになってしまったので、どうしますか？　ここはほとんどの家が解体業が貿易商なので移動手段がほとんどないのですが」

「他国から買い付けた商品はどうしてるんだ？　それを運ぶ運搬業者はいないのか？」

「中央から来ることになっているんですよ。それに自動車やバイクを見てしまうと皆血がうずいてしまうのでおちおち置けもしないんですよ」

己の愛車の成れの果てから目をそらすように目前の問題の解消に取り組むことで多少なり元気を（それでもからげんきではあるが）取り戻し始めていたジョゼだったが村人の性に話が及ぶとどうしても気落ちしてしまう。しかし、ライトはそれに気づく様子もなく朗々と話を進めていく。否、気づいているが触れないだけかもしれない。なにしろ今、彼女の目線を残骸に引き戻してしまったのは彼女のため。

「首都への移動手段は、一、馬を借りられる町まで徒歩、ただし都まで乗っていくためには都に店を置いているレンタル業者を探さないといけないため、そこそこ大きな町まで徒歩で行かねばなりません。二、ヒッチハイク、ただし、田舎なため滅多に車は通りません。三、ジョゼさんのバイクの修理を待つ、しかし時間がないためこれは却下。…徒歩しかないと思うのですがどうでしょう」

「そうだな」

「不安なことが一つありますが」

嫌な予感がある。ジョゼは聞きたくないと思いつつも流れで聞いた。

「何だ？」

「私、身体が弱いです」

「…それ、さつきも聞いた」

「大事なことなので二回言いました」

「つまり問題は無いということだな」

そして、村を出てからすでに4日たっている訳だが、2人の旅は予想以上に難航していた。主にライトの貧弱さによって。それでもなんとか馬を貸してくれる業者のいるような大きな町につくことが出来た（通常の旅人なら2日あれば余裕でつく距離）。大きな町と言っても田舎の中ではないという意味で、王都周辺と比べると雲泥の差ではある。

「そういえばトワイライトは馬に乗れるのか？」

「自慢じゃありませんが乗れます」

ライトは得意げにふふんと鼻を鳴らす。貸し馬屋を目指し、昼の大通りを人の波にのりながら2人で歩いていた。

「珍しいな、トワイライトの村じゃあ馬なんて乗れない者の方が多いだろうに」

「お義父さんに教わりました。何事も知らないよりは知っている方が良いと言って」

「腐っても騎士だな」

その言葉に、ついさっきまで穏やかに笑んでいたライトの顔から表情が消える。足は止めず、しかし、静かに尋ねた。

「ジョゼさん、ねえ、お義父さんは何も言ってくれないんですが、お義父さんのお家というのはどんなところなんでしょうか」

「どんなという？」

ジョゼも静かに返した。もうすでに雑談の空気はそこにはなく2人の間には周囲の喧噪すら排したようなただ静謐な空間が出来上がっている。

「お義父さんは私を実家には絶対に連れて行きたくないそうです。いや、それどころか自身も2度と戻りたくない。あの人にそのままで思わせる”キャット家”とはなんなのでしょうか」

「私にはあいつの考えなんて分からね。立場が違うんだ。視点が違

う。それでもいいのか？」

「ジョゼさんが来なければこんなこと、私は思いもしなかったかもしれないです。きっと知らなくても良いことなのでしょう。でも、ねえ、お義父さんが私を引き取ってから、アインスに来てからの9年間の自由は危うい天秤の上になりたっていたんですね？」

「そうだな。むしろどうやってお婆様を躲し続けたのか私の方が知りたい。まあ、今までは強要できるほどの理由が作れなかったただけだろうがな。今回は十分理由になり得た。お前のお陰でセルシスはまだ自由でいられる。何れは帰らなければならなくなるさ」

ライトはひとりとジョゼに視線を向けたまま揺らすことなく続きを促した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6976u/>

黄昏と猫

2011年11月17日03時29分発行